

優秀賞

水の叫び

川口市立高等学校附属中学校 三年 杉本 萌々音

私は水。毎日、植物の成長の元となり、あなた達人間の喉を潤している。だけど今、私は安全な水をあなた達に届けることができない。家庭や工場から流れ込む汚染物質が、私を黒く濁していくから。かつて透き通る美しさを持っていた私は、今はもう魚も住めないほど汚れてしまった。私の仲間である川や湖の中には、人々を病気にしてしまった子もいる。どうか、私たちの声をきいて欲しい。汚さないで。無駄にしないで。私たちはただ、命を育みたいだけなの。あなた達と一緒に、生きていきたい。

そんな水の叫びを聞いたのは、小学校の探求学習で水問題について学んだときだった。それまで私は「水は流せば消える」と思い込んでいて、生活排水が水質汚染の原因になっているなんて考えたこともなかった。知らず知らずのうちに自分たちが水を汚していると知り、驚くと同時に罪悪感を覚えた。

そのとき、私は家の近くを流れる荒川のことを思い出した。家から徒歩五分ほどの距離にあるこの川は、私たちの生活に必要な、命とも言い換えられる川だ。しかし、私はいつも荒川を見るたびに、「水が濁って茶色くなっている。汚いな。」と思っていた。しかし家に帰り、昔からここに住んでいる祖母に尋ねると、荒川も私たちによって汚された川だということが分かった。戦後すぐのころはまだ泳げるほどきれいだったそうだが、経済復興とともに人口も増え、川が汚れてしまい、今は遊ぶことができない。私たちが出した工場や家庭からの汚染物質が川を変えてしまったのだ。

例えば油。食器洗いの時にマヨネーズや揚げ物の油などの汚れを拭き取らずそのまま洗うと、その油が川や海まで流れてしまい、汚れていく。洗剤も同じだ。川や海に流れた合成洗剤は一カ月経っても三分の一強が全く分解されず、水中に漂う。

このように、家庭で日常的に使う洗剤、油、化学物質などが下水処理施設を通らずに直接流れ込むと、川や海の水質悪化につながる。母がいつも「油汚れをちゃんと拭きなさい」と言っていた理由を、私はようやく理解した。

荒川を見に行くと、相変わらず茶色く濁った水が流れているのが見えた。

「私はゴミ捨て場じゃない！」

そんな水の叫びが聞こえた気がした。

それから、私は家族と話し合い、生活排水を減らすためにできることを実践することにした。例えば、皿を洗う前にキッチンペーパーで油やマヨネーズを拭き取ること、環境に優しい洗剤を選ぶことなどだ。小さなことかもしれないが、こうした意識を持つことで、少しでも水質汚染を防ぐことができると私は考えている。

しかし、一つの家庭の意識だけでは、水質は変えられない。生活排水は私たちが毎日出しているものだからこそ、一人一人が意識を持つことが大切だ。「流せば終わり」ではなく、その先の環境のことを考えながら水を使うことが必要のだと、私はこの授業を通じて学ぶことができた。これからも、小さな行動を積み重ねていきたい。私たちが行動すれば、水は再び美しくなれるのだから。